

<p>団体名</p>	<p>NPO法人三段峡－太田川流域研究会（さんけん）</p>	<p>活動タイトル</p>	<p>ミライのリーダーを育てる！生態系調査から活用へ一歩進めるエコ事業</p>
<p>活動対象地域における生物多様性の保全に関する現状と課題</p>		<p>■活動風景</p>	
<p>私たちがフィールドとする安芸太田町は広島県北部に位置し、県内最高峰の恐羅漢山など標高1,000mの山々に囲まれながら、中心部は標高が200m台まで下がる高低差の大きな地域である。国の特別名勝であり西中国山地国定公園特別保護地区の渓谷「三段峡」や、県内で唯一の江戸時代から火入れが続く草原の山「深入山」など、生物多様性の高い地域である。 安芸太田町周辺ではクマタカがアツがい生息し、2019年から4年間に9回繁殖事例が報告されている。高密度に生息し、繁殖も行われているところから森林環境は保たれていると考えらえる。深入山では希少な蝶類が5種類確認され草原の環境が維持されている。地域の高齢化による山焼き継続の困難さや、採集庄による個体数の減少は安芸太田町が対策をとり一定の成果を確認している。町の対策については私たちも協力している。 課題としては河川環境の見えない劣化が心配されている。町内の河川には広島県が準絶滅危惧種以上に指定する魚類は12種生息し、小型サンショウウオも豊富に生息する。私たちの調査では、近年減少が著しいオオサンショウウオの幼体も複数体確認され豊かな河川環境が残る。一方、漁業組合関係者などからはこの数年で魚類の個体数は大きく減ったとの証言が複数ある。また近隣の水系ではチュウゴクオオサンショウウオとの交雑種が発見された。河川環境の指標種であるヤマセミは県内での個体数が激減し、周辺の市町村での繁殖例は1例のみであったが、昨年の私たちの調査ではヤマセミの町内繁殖例は認められなかった。 また私たちの調査や保全活動は地域の環境を調べるフィールドワーカーと呼ばれる専門家の協力を得て実施している。しかしフィールドワーカーの高齢化による後継者不足が懸念される。科学的な調査や保全は彼らの存在をなくしては成しえない。将来的な生物多様性の保全にとって喫緊の課題と認識している。</p>		<p>モニターツアーの様子 植物についての解説</p>	
<p>■活動報告</p>		<p>■1年間の目標に対する達成状況(まとめ)</p>	
<p>●中学・高校生によるフィールド調査の成果発表 広島市内にあるバタゴニア広島店にて事業で実施した河川の生態系についての調査結果を、調査に参加する中学・高校生が発表する。また日本生態学会中国四国地区会および調査フィールドに施設にて調査ポスター展示と解説をした。伝える力の育成と市民への啓発をする。 ●フィールド調査をもとにしたエコツアープログラムの造成 フィールド調査に参加した中学・高校生が、その体験や学びをエコツアーのプログラムを作成し、実際にモニターツアーをした。当日は雨天のために急遽プログラムを変更したが、参加者からは高い評価を得た。プログラムは当初は川での体験プログラムだったが、増水のために、フィールドの植物の解説、アマゴのつかみ取りと調理体験、生き物を調べて図鑑をつかった。 ●フィールドの調査・プログラムの作成 フィールドの生態調査 9回とプログラム造営とフィールドの調査を7回、また展示物作成をした。</p>	<p>●内部人材の育成 本助成金を通じて、組織内部でも学術的な形式による報告・発表のノウハウを学び、学会でのポスター発表や調査方法のノウハウが蓄積できた。当初の目的であった内部人材の育成にも成果があった。 ●組織文化としての調査の発表と活用 中学・高校生人材がお互い学び合い成長する関係性を構築できた。目標より多い3回の発表の機会を作り、伝える仕組みができた。助成期間終了後ではあるが、調査の要旨を日本オオサンショウウオの会で発表要旨として提出し、論文の執筆もできた。 ●フィールド調査をもとにしたエコツアープログラムの造成 フィールドの生態調査を実施し、調査をベースにしたモニターツアーを造成し、実施した。参加者からは「非常に満足」が最も多く、高い評価を得た。 ●参加費等の収入の確保 モニターツアーではあるが参加費を徴収し、持続的な運営を実現した。</p>	<p>調査結果の報告 広島市内 バタゴニア広島</p>	
<p>■事業を通じて得られたノウハウ</p>		<p>■望ましい社会状況を達成するための課題</p>	
<p>●内部人材の育成 学術的な形式による報告・発表の方法を習得した。学会でのポスター発表等の参加の方法や、発表会場の交渉などの方法も習得できた。また生態系の調査方法やツアープログラムの造成の方法など共有できた。 ●組織文化としての調査の発表と活用 中学・高校生生との調査やツアー造成の方法を経験できた。当初の想定より「忙しい」現代の学生との事業遂行は困難もあったが、早めの日程の確保や、グールドキュメント、スプレッドシート、SNSやビデオ会議など工夫をして作業を進められた。 ●フィールド調査をもとにしたエコツアープログラムの造成 フィールドの生態調査を実施し、調査方法や生物の同定の方法など学んだことや自身に関心を持ったこと、面白いと思ったことなどから、ツアープログラムへの落とし込みを経験できた。また実際に小学生に対するインストラクションやコミュニケーションの技術を学べた。</p>	<p>●従来の保全活動が学術的な報告となり、今後の保全活動がより精度の高いものになり、地域の環境がより効率よく保全されるために、継続的な実施と内部の人材育成の継続が必要である。 ●本事業で育成された人が、彼らが今後居住する地域でも生物多様性保全の取りむために、今後も事業を継続し同世代の仲間同士のコミュニティー形成が必要である。 ●地域のフィールドワーカーの後継者の育成がなされ、広島県のレッドデータブックの策定の精度が担保されるために、より多くの人材を育てる資源が必要である。</p>	<p>■活動成果のアピールポイント（自由記入）</p>	
<p>この1年間の活動を通じて</p>	<p>広島市からの環境を守るリーダー育成の第一歩を</p>	<p>を達成しました。</p>	
<p>■受益者の具体的な変化（自由記入）</p>			
<p>自然好きの対象者が、好きから調査⇒研究⇒社会へのアウトプットを経験して、「研究者」「市民活動家」として成長したと考えています。とくにフィールド調査の対象の一つであったオオサンショウウオでは、学術的な研究まで発展し、学会等での発表を経て、研究者としての成長がありました。</p>			